ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「ロラン、ロランってば。早く起きないと、学校、遅れちゃうよ？」

　可愛らしい声が、寝ている俺の耳に届く。誰かの手が、毛布の上から体を揺さぶる。俺としてはもう少し寝ていたかったが、『遅れる』と言われてしまえば起きない訳にはいかない。寝坊したかと慌てて目をあけた先に、デジタル目覚まし時計の数字が、ぼんやりと飛び込んできた。現在、六時十分前。俺がいつも起きる時間は決まって六時で、目覚ましもその時間に設定していた。なので、『遅れる』というの、正しい日本語ではないだろう。寝坊したかと思ったが、むしろ早く起きてしまった。

「にゃ……にゃにが遅れるって？　もうちょい寝かせてくれ……」

　自分でも分かるくらい寝ぼけた声でそう呟いてから、俺はもう少し寝るべく、目を閉じようとした。そんな俺の体から、慣れない手つきで毛布が引っペがされる。今は春だが、この時間帯は、毛布無しで寝るにはまだまだ寒い。可愛い声で起こされる事は悪くないが、こうも寒い中、毛布を剥がされるような起こし方が後から来れば、不快感の方が強い。寒さのせいで、だんだんと頭も覚醒してきた。

　俺は再び目をあけて、毛布を取り上げた奴を見上げる。そいつはちょっと頬を膨らませて、俺を睨んでいた。くりんとした、大きめの目を吊り上げている。本来ならビビり上がる場面なのだろうが、いかんせん、そいつのその仕草が可愛く、ちっとも怖くない。

　肩まで伸びた黒髪の天然ウェーブが特徴……いや、頭のてっぺんから伸びたアホ毛の方が特徴的な彼女は。俺と同い年の女の子で、名前の由来は、研修生番号の下二桁が『５８』だったからだそうだ。『つのち』で『樹葉』である。『６８』から『ロラン』なんて名前をつけた俺に比べれば、実に納得のいく名付け方だと思う。

「もぅ！　そんなこと言って、今日は入学式でしょ！　朝練と朝食、それに、制服を着る時間を考えたら、もう起きなきゃ間に合わないって！」

「あー……」

　そう言われて、俺は今日が、中学校の入学式だということを思い出す。確かに小学校までは、いつもの時間に起きてもギリギリ間に合うが、中学校となれば話は別だ。制服を着るのは今日が初めてなので、おそらくちょっと手間取る事――特に、ネクタイを結ぶあたりで――は想像に固くない。

「分かった、起きるよ」

　仕方なしに、俺はベッドから降りる。入学式だからといって、日課の朝練をサボるつもりも、朝食の量を少なくするつもりもない。特に、今日の朝食当番は樹葉だが、樹葉は小学生――いや、今日からは中学生か――の割に、俺が知っている中では一番料理が上手いので、食べ損なうことだけは、なんとしても避けたい。

　ベッドから降りた俺は、軽く伸びをしてから、壁に掛かっている二本の愛刀を手に取る。必要最低限の物しか無い俺の部屋の中で、この二本の刀は、その存在感をいかんなく出していた。ずっしりと手にかかる重さと、未だに自分の背丈以上の刀身に安心感を覚えながら、俺は鞘を撫でる。

「おはよう」

　愛刀にそう呟く俺の後ろから、やれやれと溜息をつく音が聞こえる。刀に挨拶をする様子は、傍から見れば滑稽なのだろうが、俺はこの刀を授かった日から、この挨拶を欠かしたことは一度もない。この刀、『ヘヴンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』は俺の分身と言っても過言ではないのだ。たまに抱いて寝ることもあるくらいである。俺は、二本の愛刀を壁に掛ける。

「おはよう」

「普通、真っ先に挨拶するのは、刀よりも人間だと思うんだけどな」

　言い忘れていた、というような俺の口調に、樹葉は思わず苦笑する。

「制服着ないといけないんだから、いつもより早く帰ってきてね」

壁に掛かっているジャージを俺に渡しながら、樹葉は少し笑いながら俺にそう言うと、部屋を出た。俺は素早くジャージに着替えて、軽く屈伸をしてから、部屋を出た。